

白山の自然誌 3

# 蛇谷の自然



石川県白山自然保護センター

## はじめに

白山北方に位置する蛇谷地域は、地形が険しい上に冬期間なだれが頻繁に発生する自然条件の厳しいところです。そのため、以前は人々はほとんど訪れることがなく、多くはもとのままの自然が残され、サル、カモシカ、クマなどの動物たちの憩いの場所でもありました。近年、この地にも道路が整備され、私達にもその自然を楽しむことができるようになりました。自然は私達が推し量ることができないほど雄大であり、また力強いものですが、一面、もろいところがあります。自然のもろさは、一度壊されると、もとにもどるのに長い年月が必要ということです。そのため、私達が自然に接する時には、十分にそのことに気をくばらなければなりません。この小冊子では、原始性の高い蛇谷の自然の代表的なものについて、主に昭和52年度～57年度に実施した「尾添川流域自然環境保全調査」の成果をもとに解説しています。

蛇谷の自然を代表する原生ブナ林



# 目 次

## はじめに

### 生きものの環境

V字峡谷	2
滝の形成	3
豪雪となだれ	4
自然への働きかけ	5

### 川の生きもの

荒れ谷にすむイワナ	6
本流と支流	7
ダム建設と河川生物	8

### 山の緑

雪と植物	9
高茎草原	10
ブナ林	11
クロベ-ヒメコマツ林	12
ミズナラーリョウブ亜高木林	12
林道建設による植生への影響	13
植生の復元	14

### 動物の生活

森の中のけもの	15
餌付けザル-カムリの群れ	16
カモシカの家族	17
ツキノワグマの1日	18
渓谷の鳥	19
イヌワシのすみか	20

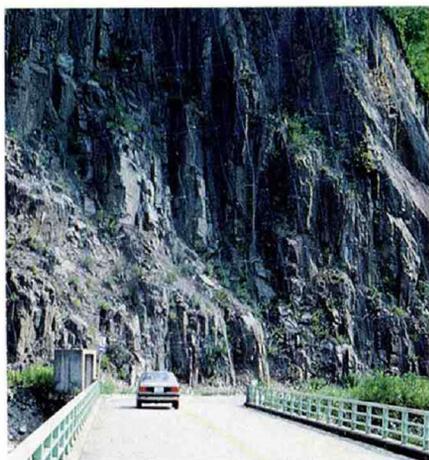
# 生きものの環境

## V字峡谷

蛇谷本流は白山北方をほぼ東西方向に流れ、その源は東方の石川・岐阜の県境の尾根すじ（標高1,700~1,800 m）に発しています。下流は三ツ又（標高約550 m）で中ノ川、丸石谷と合流し尾添川となり、手取川本流には瀬戸野で流入します。

白山地域は、白山火山噴出物の分布域を除くほとんどの場所が侵食の進んだ急峻な地形をなしています。中でも凝灰岩からなっている地域は侵食量が大きく、特に険しく、蛇谷地域はその代表的なものといえます。

蛇谷地域には、中生代後期（約8,000万年前）に噴出した濃飛流紋岩類が分布しています。濃飛流紋岩類は白山地域をほぼ分布域の北端とし、南は飛驒山地、木曾谷にかけて広く分布し、溶結凝灰岩を主な構成物としています。溶結凝灰岩とはこの名が示すとおり火山灰が集まってできた岩石（凝灰岩）の一種ですが、火山灰がまだ熱いうちに堆積したため、灰の粒が変形し、互いに溶結して一体となったものです。そのため、冷え固まってゆく過程で収縮が生じ、溶岩で見られるのと同じように柱状節理を形成することがあり、硬く緻密な様相をみせます。しかし、一見したところ硬くみえる岩石も、長い年月の水などによる侵食にはもろく、谷は数十mにもおよび深くえぐられ、壮年期の地形に特徴的なV字峡谷を形成しています。



柱状節理



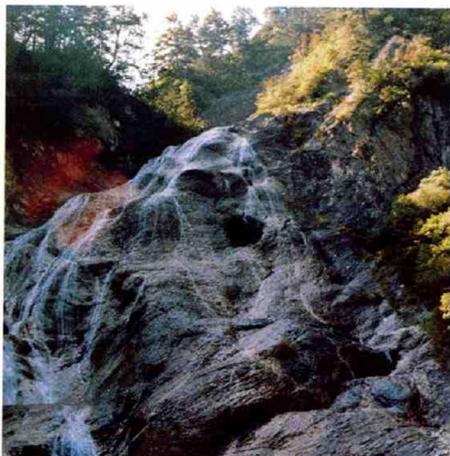
V字峡谷

## 滝の形成

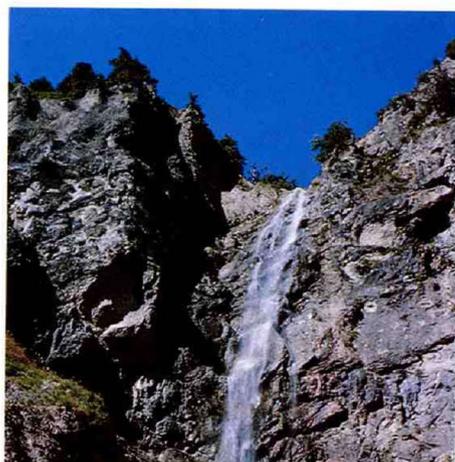
蛇谷を訪れた人がまず目にする地形といえば、深くえぐられたV字峡谷に加えて大小の数多くの滝があります。大きいものには50m以上の落差をもつものもあり、姥ヶ滝、カモシカ滝、ふくべの大滝などと名が付けられています。滝は川があればどこにでもできるものではありません。白山の他の地域にも不動滝、百四丈滝など有名な滝がいくつかありますが、蛇谷地域のように狭い地域に多数の滝がみられることはなく、蛇谷の滝は蛇谷の自然を代表するものの一つといえます。

蛇谷の滝は、蛇谷本流とその支流の合流点に形成されています。本流は支流にくらべて水量が多く、そのため侵食量も支流より多くなり、合流点で落差ができます。しかし、普通は滝といえる程の落差はできませんが、蛇谷地域の凝灰岩は凝灰岩のうちでも特に侵食にもろい岩質であるため、その合流点で侵食量の差が顕著にでて、滝がつけられたと考えられます。

蛇谷の滝の中には、姥ヶ滝のように急な斜面をもち本流に直接流れ落ちるものと、シリタカ滝やふくべの大滝のように、ほとんど垂直で、本流から少し奥まったところ(滝の後退)に落下するものがあります。このちがいは滝を形成している岩石のちがいによるものです。姥ヶ滝などは凝灰岩のみからなっていますが、ふくべの大滝のように垂直に近い滝は、他に凝灰岩より侵食に対して強い角礫岩が凝灰岩の間にはさまれ、両者の侵食量のちがいによって、滝の後退が生じているのです。



姥ヶ滝



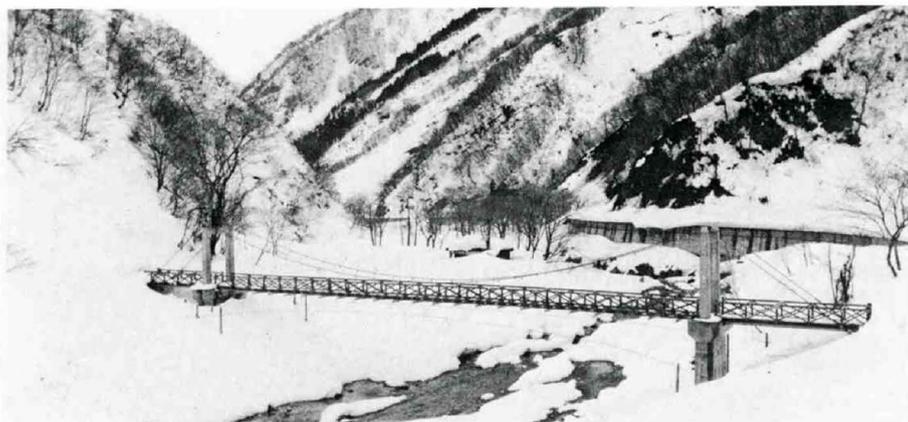
ふくべの大滝

## 豪雪となだれ

最近は道路が整備され、蛇谷地域へは春から秋にかけて気軽に行くことができるようになりました。しかし、冬期間は全く私達をよせつけません。それは、日本海の水分を多量にすいこんだ冷たい北西風が、白山の峰々に衝突し、多量の雪を降りおとすためです。蛇谷の下流域にあたる三ツ又や、白山自然保護センター周辺（標高約 600 m）でさえ例年 3～4 m の積雪があり、蛇谷地域全体として随分と多量の降雪があることが想像できます。

この雪は春先になると徐々に溶け始め、蛇谷の水量を増し、人間を含めた生きものたちにうるおいを与えます。しかし、一方では、蛇谷のような急峻でけわしい所では、なだれを頻繁に発生させ、その傷あとを山腹のいたる所に残します。また、このなだれは山の斜面の土砂をもいっしょに川に流し込み、時には川を土砂でせき止め、洪水の原因ともなります。昔から蛇谷は「荒れ谷」といわれていますが、急峻な地形と多量の雪がそのもととなっているのです。

このような自然条件の厳しい冬の間を生きぬくことは、生きものたちには並大抵のことではありません。しかし、一方では、この厳しい冬は人間が近づくことを拒むため、冬期間、生きものたちが全くの自然状態のままで生活することも意味します。



冬の蛇谷

## 自然への働きかけ

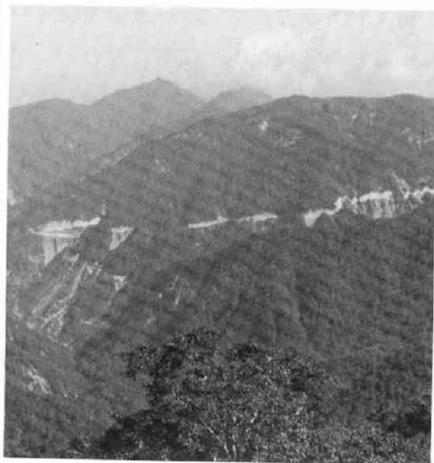
蛇谷地域には古くから中宮温泉があり、病気療養に利用されてきましたが、以前は道路事情が悪く、訪れる人はわずかでした。一方、地元の人たちは、かなり以前から焼畑を行ない、蛇谷流域のかんりの山腹斜面がそのために利用されていたようです。

焼畑は白山麓で広く行なわれてきた農業形態で、山腹のやせた土地を焼くことにより、土地をこやし、穀物を生育させました。焼畑地は本村から遠く離れていることが多く、多くは畑地近くに小屋（出作り小屋）を建て、焼畑の作業に従事しました。しかし、焼畑農業が広く行なわれていたのは昭和30年頃までで、その後はほとんど行なわれることがなくなりました。現在、出作り小屋跡地には、当時食料と生活資材に使用したオニグルミが林をつくり、焼畑地は草地や杉の植林地となっているところが多いようです。

その後、外部から人々が蛇谷地域に訪れることが多くなったのは、道路の整備が重要な役目をなしています。白山林道がその代表的なもので、今までにない大きな働きかけを自然に対して行ない、また、多くの人々にも蛇谷の自然との交わりを作りました。



雪に埋もれる出作り小屋



白山林道

# 川の生きもの

## 荒れ谷にすむイワナ

春～初夏、蛇谷の水量は、一日のうちに数倍も変わることがあります。源流に残っている残雪が溶け、川の水量を増やすのです。融雪と豪雨が重なり、大洪水となったことも何回もありました。蛇谷は典型的な荒れ川です。

林道開設前は、蛇谷はイワナの宝庫でした。今でも源流では、イワナの数は決して少なくありません。イワナは、完全な肉食魚です。カゲロウやカワゲラなどの底生動物はイワナの重要な餌です。しかし、蛇谷本流の水生昆虫は、イワナを養うのに十分な量とは思えません。では、蛇谷のイワナは、餌不足でやせているかといえば、決してそうではありません。イワナは、川底の動物や水中を流れてくる動物を食べるだけでなく、水面に落ちてきた動物（主に落下昆虫）も餌にします。ブナなどの自然林が多い蛇谷には、林から川へ供給される餌量は少なくないでしょう。

イワナが残るためには、それ以外にも必要な条件があります。隠れ場（シェルター）とくに増水時の隠れ場が必要です。川が砂利や小石だけでは、いざというとき、隠れ場がありません。直径1m以上の岩礫のあることも必要です。土砂が流出して川床が埋まることは、好ましいことではありません。

河川の河床や流量の安定、陸上からの餌の供給、いずれにしても陸上の森林を保全することが、けっきょくはイワナなどの河川生物の保護に結びついているわけです。



イワナ



イワナの胃内容物

## 本流と支流

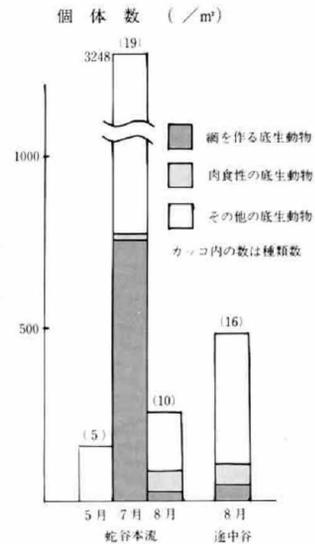
本流と支流の底生動物には、どんな違いがあるでしょう。図は、1982年に調査したセンター周辺の蛇谷本流とその支流途中谷の水生昆虫の変化です。

1982年の春は、雪も少なく、7月までほとんど大規模な出水はありませんでした。それでも融雪洪水の続いている5月には、本流の底生動物は種類数も個体数も少なく、それも小さな個体ばかりでした。7月は蛇谷としてはまれな、豊かな生物相でした。恐らく、ほとんど洪水もなく、水量の安定していたことが原因でしょう。8月上旬の台風10号は、蛇谷流域にも豪雨と出水をもたらしました。7月には、19種約3000個体/㎡もいたものが、10種約270個体/㎡にまで激減しました。種類数で約半分、個体数では1/10以下です。一方、支流の途中谷では種類数も個体数も、本流の2倍近くもの豊かな生物相を保っていました。このことは、支流のほうが水位変動が少なく、生物相が破壊されにくいことを示しています。

本流にいつでもみられる種類は、ヒメヒラタカゲロウとコカゲロウです。これらは砂の多い河床の不安定な河川にも生息できる種類ようです。河床が安定していた7月の蛇谷や途中谷では、シマトビケラやヒゲナガカワトビケラが多くみられました。これらの種類は、石のうえや石と石の間に網を張って水中を流れてくる餌を待ちます。洪水ができればすぐに網はつぶれてしまいます。



本流（右）と支流（左）の底生動物

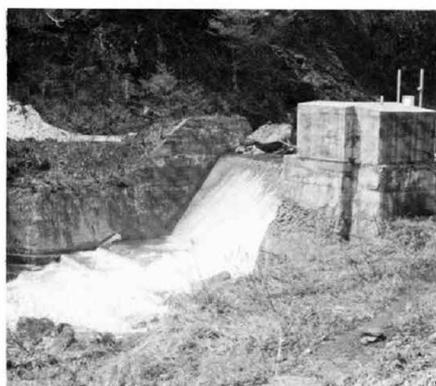


本流と支流の底生動物の種類数と個体数

## ダム建設と河川生物

土砂流出を抑える応急処置は、砂防ダムです。牛首川ほど多くはありませんが、蛇谷本流にも6基の砂防ダム、さらに1基の発電取水ダムがあります。これらのダムは、イワナなどの魚類の移動を防げるだけでなく、河床の形を変化させて、底生動物にも大きな影響を与えます。

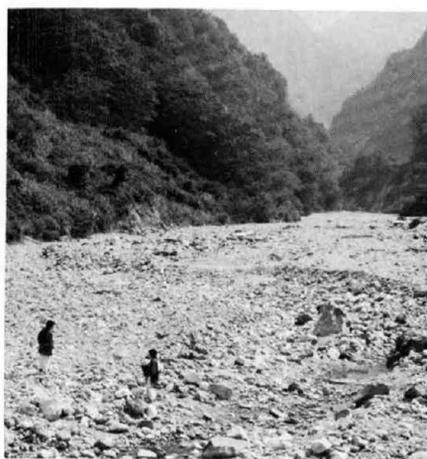
ダムの上流側には、砂が堆積し、「堰提型平瀬」といった、平瀬の部分が長く続きます。河川環境は単純になり、石と石のすき間や深い淵・早瀬は消滅します。その結果、生息する種は少なくなり、コカゲロウやヒメヒラタカゲロウといった、砂底に強い昆虫が残ります。砂防ダムは、荒れ谷を安定させるのが目的ですが、一方で河川環境を単純にして生物をすみにくくする面があります。現在の蛇谷では、発電用の取水による水量減少も生物をすみにくくしています。



取水ダム



平水区の蛇谷



濁水区の蛇谷

# 山の緑

## 雪と植物

冬期間蛇谷地域一面をおおう多量の雪と融雪期に発生するなだれは、蛇谷の河床を変化させ河川動物の生活に影響を与えるだけでなく、山に生育する植物の生活をも左右します。それは積雪量と積雪期間の長さが、植物の生育期間を左右するためです。また、なだれは直接に植生を破壊し、植物の生育しない裸地を作ることもあります。そのため、同じ蛇谷地域でも、雪の多いところと少ないところ、なだれがよく発生するところとそうでないところ、その他、地形などの環境によって、生育する植物の種類が変わり、群落の姿も変わってきます。

蛇谷地域の植物群落は、大別すると森林と草原とに分けることができます。草原には高茎草原と人工草地が、森林にはブナ林、クロベ-ヒメコマツ林、ミズナラーリョウブ亜高木林などがあり、それぞれが生育に適した場所を確保しています。これらのうち、高茎草原は傾斜が急で土壌の比較的不安定な自然条件の悪い所に、ブナ林は比較的條件の良い所に生育しており、一般に生育環境が良くなるにつれ、植被率が高い群落へ、また高さが低い群落から高い群落へと変化するといえます。



初冠雪のブナ林

## 高茎草原

一般に谷や沢すじの凹地では、冬期間雪が吹きだまり、他の場所にくらべてかなり遅い時期まで雪が残り、樹木などの生育には適さない場所といえます。積雪量はそれほど多くなくても、なだれを発生しやすい急傾斜地も土壌が安定しておらず、樹木の生育には適していません。このような場所では、普通、背の高い草本類を主体とした群落が発達します。

高茎草原は文字通り背の高い(1.5~3m)草本類を主体とするもので、上層と下層の2階層からなります。上層にはアカソ、クロバナヒキオコシ、ヤマヨモギ、ススキ、カリヤス、ウドなどの背の高い草本類が優占し、ひとつの場所で、2ないし3種が同じ程度で生育していることが普通です。下層の構成種としてはオオアキギリ、ウワバミソウ、クジャクシダ、スギナなどがあげられ、植生の生育密度も高く、草が繁茂しているという感じを与えます。

しかし、一面華やかでない蛇谷の高茎草原も、この地帯にすむニホンザルやカモシカなどの動物には、かっこうの餌場になっています。春先の餌の少ない時期、彼ら動物たちがまず最初に餌を求めるのはこの草原に生える若草で、動物たちには重要な餌場といえます。



高茎草原の断面模式図(菅沼原図)



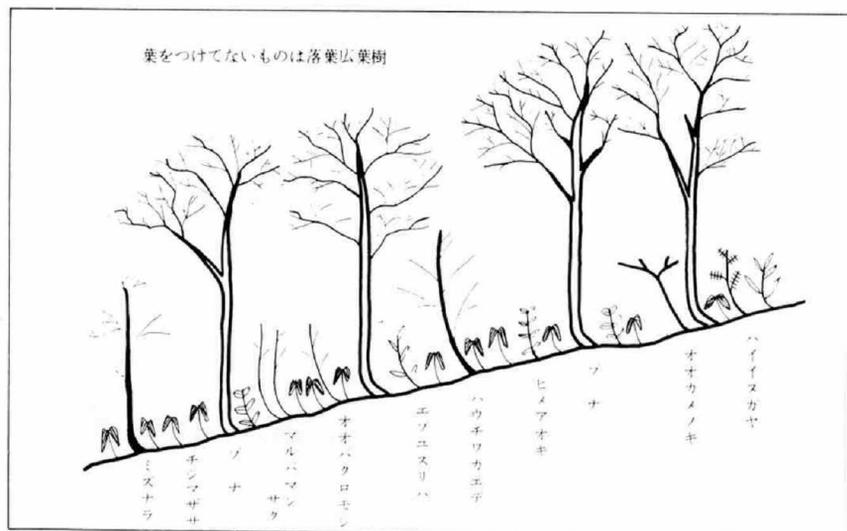
高茎草原でエサをとるカモシカ

## ブナ林

ブナ林は白山の山地帯を代表する植生で、蛇谷地域の植生の中では、最も広い面積を占めます。他の植生にくらべて、土地が安定し、土壌条件の良い場所に発達しています。蛇谷地域のブナ林は林内にササが少なく、林床一面にびっしりとササが生育している太平洋側のブナ林とは対照的です。

蛇谷のブナ林の高木層はほとんどブナからなります。ブナは高さが30 m近く、胸高直径が60~90 cmと比較的大きなもので、200年から300年の風雪に耐えぬいてきたものの中にはあります。亜高木層は構成樹種が豊富で、優占種であるオオカメノキのほか、カエデ類、タムシバ、コシアブラなどが生育しています。低木層、草本層としてはヤマウルシ、オオバクロモジ、オオカメノキ、コカンズゲ、チシマザサなどが生育していますが、ヤマソテツ、シノブカグマ、シラネワラビ、シシガシラといったシダ類が多いのも特徴です。

落葉広葉樹林であるブナ林は、春の芽ぶきに始まり、青葉の夏、紅葉の秋、そして冬になって落葉と、四季折々にその姿を変えます。その林の中で、多くの生きものたちがブナ林から恩恵を受けています。春先のブナの芽や花、秋の実などは、鳥やサル・クマなどのけものたちの大切な食料です。樹木の空洞は鳥や小ほ乳類の巣やすみかとしてもよく利用されます。このように、ブナ林は動物たちには生活をささえる大切な場所といえます。



ブナ林の構造

## クロベーヒメコマツ林

ブナ林域の尾根筋や岩場などに見られる針葉樹林です。このような場所は、谷筋などの凹地にくらべると、冬期間北西の季節風を直接受けやすく、雪が吹きとばされ、この地域の中では積雪量は少ない方に属します。また、土砂なども集積せず、土壤が乾きやすく、肥沃度も低いところといえます。

クロベ、ヒメコマツの高さは10数m、胸高直径は大きなものでも50cm前後と、ブナ林にくらべて小さく、これは生息場所がやせ地であることと、冬季の季節風を直接受けるためと考えられます。この森林を構成する亜高木層、低木層はシャクナゲ、クロソヨゴ、タムシバなどであり、草本層はクロソヨゴ、オオバスノキなどが多くあります。これらの種はブナ林を構成するものと随分と異なっています。



クロベーヒメコマツ林

## ミズナラーリョウブ亜高木林

背の高さが4m前後と比較的低い落葉広葉樹を主とするもので、ミズナラ、リョウブを主要種とし、他にタムシバ、コシアブラ、マルバマンサク、ナナカマドを木本類として交えています。草本層の優占種はコメツツジなどで、他にも数多くの種類の構成種をもちます。

この植生は冬季にすっぽりと深い雪におおわれ、春先になってもなだれの発生しない比較的安定した場所に生育します。積雪量が多いため、構成種は雪圧に強い種が優占し、その幹の基部は雪圧によりすべて屈曲し、その林内は太平洋側ではみられない様相を呈しています。



ミズナラーリョウブ亜高木林

## 林道建設による植生への影響

蛇谷地域は昔から秘境の地といわれ、以前は山仕事用の細い山道があるのみでした。近年になると、山林開発に伴い自動車道路が整備され、昭和52年には尾口村一里野から岐阜県白川村鳩ヶ谷にぬける白山林道が開通、一般供与になりました。総延長33.3kmにもおよぶこの山岳道路は、石川県側の蛇谷地域では南向き山腹斜面をヘアピンカーブで廻り、石川・岐阜の県境へ達します。

急峻な地形を通りぬける白山林道では、山腹斜面への土砂の流出があり、それに伴う樹木の損傷という直接的影響がみられます。特に林道谷側の凹地形の場所では土砂が集まりやすく、その影響が大きくあらわれています。

山岳道路の建設に伴う植生への影響に、もう1つ、よく問題にされる林縁の後退という間接的な影響があります。これは、それまで連続していた森林が、林道の建設により分断され、林内が直接風や太陽にさらされることにより林床植物が枯死し、草原に生育する植物が侵入し、少しずつ林縁が後退するというものです。白山林道では、この影響がわずかにみられるところもありますが、ほとんどありません。このことは、蛇谷地域が主にブナ帯からなっており、ブナ、ミズナラが環境の変化に比較的強いことを示唆していると考えられます。



林道開設に伴う土砂の流出

## 植生の復元

林道開設によってできた道路法面や土砂流出による山腹斜面の裸地は、景観上からも周辺植生の保護という面からも好ましいものではなく、道路建設後は、これらの場所で緑の復元が試みられています。

緑化復元というと人工種子の吹き付けをまず思い浮かべますが、それ以上に大切なのが生育基盤の安定です。地盤が安定していなければ、いくら種子をまいても植物は生育しません。そのため、ロックネットをあてたり、編柵、フトンカゴ、よう壁などを設けたりします。時には、植物の生育を促進するため人工土壌をいっしょに斜面にふきつけることもあります。種子吹き付けに用いる種子には、ススキ、ヨモギ、メドハギ、イタドリなど比較的繁殖の強い植物が使われています。

白山林道沿いで緑化復元を行なってから長いもので10年、多くはまだ5、6年しか経っていないので、まだ十分にその成果がでているとはいえませんが、現在のところでも植生復元の効果がでているものと、そうでないものがあります。一般に傾斜が $30^{\circ}$ ～ $40^{\circ}$ と比較的ゆるい斜面で、土砂の安定しているところは良好で、導入した植物以外にもブナ、アカソ、ウドなどの自生種も周辺から入ってきて、生育しています。一方、急傾斜地は土砂が安定せず、植生復元は思うようにははかどっていないのが現状です。また、植生復元の効果が上がっている場合でも、草地になっているだけで、最も望ましい復元の姿、森林の回復には、まだまだ多くの時間が必要だといえます。



植生復元が良好な法面



植生復元が思わしくない法面

# 動物の生活

## 森の中のけもの

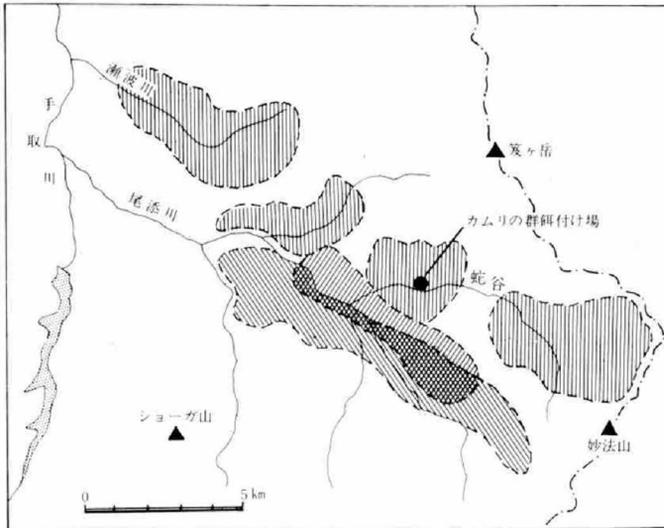
森の中には、1mm以下の微細な土壌動物から大型ほ乳類まで、数多くの種類の動物が生息しています。その中では、サル、カモシカ、クマなどの大型ほ乳類が、私たちに最もなじみ深い動物でしょう。

蛇谷地域は、地形が急峻で、森林の開発はほとんど行なわれなかったため、これらの大型ほ乳動物の生息密度は、全国的にも最も高い地域の一つです。

けもののは、餌付けされたサル以外、普通野外では、ほとんど出会う機会がないので、彼らの生活様式も森のペールに包まれています。近年ようやく一部が明らかになってきました。春、夏、秋、冬と四季折々に変わる山の中を、彼らはエサと安全なすみかを求めて生活しているわけですが、その生活や遊動様式、範囲など、同じほ乳類といえども、それぞれに異った生活を営んでいます。またそれぞれの方法で、深い雪におおわれる長く厳しい冬を生きぬいてきたものばかりです。



餌付け場のカムリの群れ



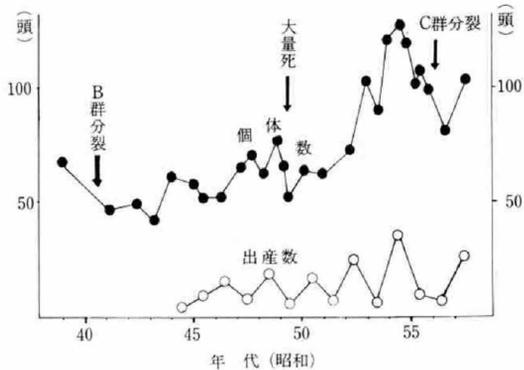
## 餌付けザル—カムリの群れ—

県下では、明治時代まではニホンザルが加賀地方の山間部に広く生息していましたが、現在群れが確認されているのは、手取川上流の瀬波川流域と尾添川流域及び犀川上流の高三郎山周辺だけです。尾添川の上流域にあたる蛇谷流域には、タイコA・B、カムリA・C、国見の群がその遊動域の主要部分を持ち、250~300頭が生息していると考えられています。これらの群れのうち、カムリA群が昭和41年に餌付けされてから15年以上たちました。餌を与えるのは夏の期間（5月~10月）だけに限られ、さらに餌は大豆、トウモロコシなどの加工しないものだけに限っています。そのため、餌付けザルとはいえ、かなり野生に近い状態を保っているといえます。

しかし、餌付けも長期間になると、野生の群れにはみられない影響も少しずつあらわれてきています。群れの頭数の増加と、昨年（昭和56年）の春に確認された群れの分裂が餌付けに関係あるとも考えられます。

餌付け当初約50頭であったカムリA群は、その後徐々に頭数を増やし、昭和53年には、100頭を越えるようになりました。50~60頭の時はそれ程でなかったものが、100頭以上にもなると、エサ場における餌の獲得に気を使うのでしょうか。これが一つの原因となり、カムリA群は分裂行動を起こしたと推測されます。分裂をして別行動をとるようになったのは、もとの群れの中で順位の低いメスたちの家系でした。

餌付けによって人になれすぎたり、一般の人から菓子など加工した食べものをもらうことを憶えると、観察に来た人や周囲の田畑にいたずらをするようになり、サルを悪者にせざるをえなくなります。餌場での注意深い給餌以外に食べものを与えることは、慎しまねばなりません。



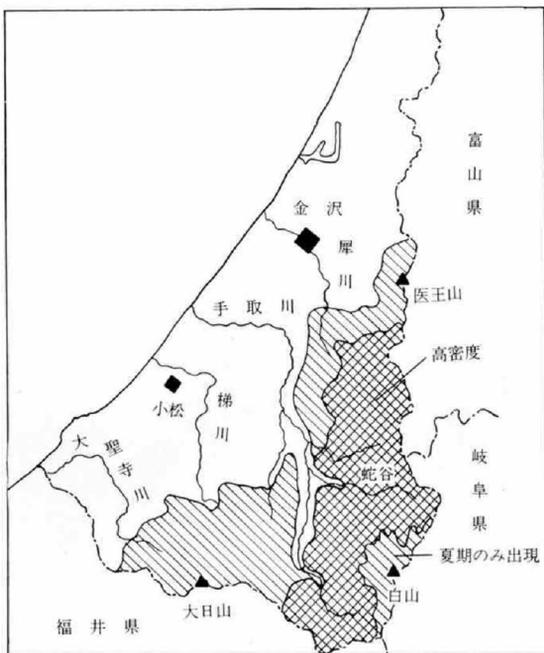
カムリA群の個体数変化

## カモシカの家族

サルは群れをなしていますが、森林のは乳類のほとんどは1頭あるいは数頭で行動しています。ニホンカモシカも、1頭あるいは親子単位で生活しています。

基本的には、メスがある程度固定した行動域を持っていて、それにペアとなるオスが、相手のメスの区域より少し広い範囲を持っています。しかし、これ以外にも単独で行動するカモシカもあります。単独のものの中には、場所を決めずに渡り歩くものと、どこかの顔見知りの行動域に居候するものがあることが、蛇谷での調査で明らかになりました。カモシカは5～6月に1仔を出産し、母親は次の冬まで仔をつれて歩きます。

白山林道周辺でも冬から残雪期にかけて、姿を見かけることがあります。石川県下では医王山から白山山系、そして大日山までに広く分布しています。昭和30年に特別天然記念物に指定され、捕獲が厳しく禁止されてから、白山地方でもその数と分布域は、増加の傾向にあり、現在石川県下に2,000～3,000頭生息していると推測されます。蛇谷流域は、地形が急峻なため、人が入りにくく、古くからカモシカが分布していたところで、現在でも1km<sup>2</sup>あたり、4～7頭と石川県下でも密度の高い地域といえます。



石川県内のニホンカモシカの分布

## ツキノワグマの1日

ツキノワグマは夜行性の動物で、昼間はめったに出歩かないと信じている人は多いようです。クマを実際に見た人はごくまれにしかいませんが、夜のうちにカキヤクリの木の枝が折られたり、飼っているミツバチの巣箱がこわされたりすることから、人知れずクマは夜行性の動物というらく印をおされたのでしょう。

動物の1日の行動を調べるには、直接に観察するのが最もよい方法です。しかし、クマのように人目を避け、森の奥深くに住んでいる動物には、この方法はほとんど無理です。そのかわり、間接的ですが、最近よく用いられる方法に、テレメトリーという方法があります。これは、生け捕りした動物に電波発振器をつけ、そこからでる電波を調べることによって、極く大ざっぱですが動物の動きを知る方法です。動物が動いているときは発振器のアンテナも同時に揺れるので、送られてくる電波は不安定となり、反対にクマが寝ていたり休んでいるときはアンテナが動かないので、安定した電波が得られます。

蛇谷地域のクマのテレメトリーは1頭についてだけしか得られていませんが、それによると日の出から数時間と日の入前の数時間によく動き、夜はあまり動かず休んだり寝ているということがわかります。また、1頭だけの記録ですから、すべてのクマがこれと同じかどうかわかりませんが、クマが夜行性の動物だということは必ずしもあたっていません。人里へ夜半カキヤクリ、ミツバチを食べに来るようなクマは、クマにとっては怖いヒトの目を盗んでこっそりと出かけてくるものだろうと思われます。



檻に捕獲されたクマ



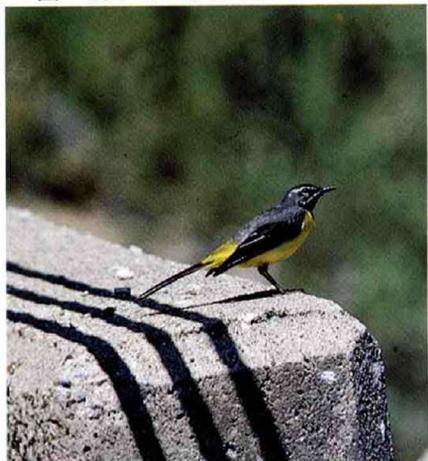
首に発振器をつけたところ

## 溪谷の鳥

白山には多くの鳥がすんでいます。鳥はそれぞれに適した環境にすみ分けて生活しています。ここでは蛇谷の溪流と、その周辺の森林にすんでいる鳥についてみてみましょう。

溪流にはキセキレイ、カワガラス、ヤマセミなどがみられます。キセキレイはガ類、ハエ類、水生昆虫の成虫などを餌とし、建物や川沿いの岩の陰に巣をつくります。夏の蛇谷では、数の最も多い鳥のひとつです。カワガラスは流れにもぐって、主に水中の石の上などにいるカワゲラやトビケラなど水生昆虫の幼虫を餌として取っています。巣は小さな滝の裏など、水の流れ落ちているところの崖のくぼみなどに、コケを集めてつくります。一方ヤマセミは魚が主食で、川沿いの土手に深い横穴を掘って巣とします。行動範囲は川沿いにかなり長い距離におよんでおり、数はごく少数です。ヤマセミやカワガラスは、冬にも蛇谷に残っているものがありますが、キセキレイは冬には平地へ移動します。

次に溪流沿いの林にみられる鳥には、アカショウビン、オオルリ、ミソサザイ、コマドリなどがいます。アカショウビンは小魚やサワガニ、カエルなどを餌としています。自然保護センター周辺では、5～6月にその鳴き声を聞くことができます。オオルリは川沿いの木の頂や枝に止って、よくさえずるので目につきやすい鳥です。空中を飛んでいる昆虫をつかまえて餌とします。ミソサザイやコマドリは、蛇谷の上流部のよく繁った林の中の、小さな流れのあるようなところにすんでいます。アカショウビン、オオルリ、コマドリは秋には南の国へ渡っていきます。



キセキレイ



アカショウビン

## イヌワシのすみか

イヌワシは白山では山頂付近にも時々姿をみせますが、一般に考えられているようには、必ずしも高山の鳥ではありません。今までの調査で明らかとなった県内の分布をみると、県中南部の低山から高山まで広く観察されており、約20つがいがいると考えられます。イヌワシは、その山地に、1つがいで数千ヘクタールにもおよぶ広い範囲を生活場所として、1年中すんでいます。中でも、よくみられる場所は深い谷があるようなところです。

イヌワシが生活していくためには、ヤマドリやノウサギなど餌となる動物が豊富なこと、その餌を見つけ捕獲しやすい場所、たとえば草原や低木林などの開けたところがあること、巣をつくるのに適した岩場があること、上昇気流のわきやすい地形であることなどが必要となります。

蛇谷は谷が深く急峻で、方々に岩場があり、またよく繁った森林と高茎草原や低木林が適度に散らばっており、餌となる動物も数多くすんでいます。また入山者も夏から秋の行楽シーズンには比較的多いですが、巣づくりから幼鳥の巣立ちの時期となる冬から春にかけてはほとんどありません。これらのことから、蛇谷はイヌワシの生活にはふさわしいところの一つといえるでしょう。



イヌワシの巣



イヌワシの幼鳥





編集発行 石川県白山自然保護センター  
石川県石川郡吉野谷村中宮  
Tel 076196-7111  
発行日 昭和57年9月20日